



秋葉大権現社(秋葉神社)の歴史と信仰(上)



秋葉神社拝殿

いを見せていたことを窺わせてくれます。

かような興隆を見せた同社も、創建以前は、「秋葉・稲荷両社由来由書」・「千葉社記」(以下「縁起」と呼ぶ。)によるとり、五百崎の千代世の森と呼ばれ、荊棘道があり人知れぬ場所であったとされています。

「縁起」では、正応二年(一二八九)、「千代世稲荷大明神」として同地にて祀られていたものが、既に江戸期には「古跡」となりはてて、百姓岩田与右衛門によって管理されていたとされています。こうした中で、同地を訪れた修験者「千葉葉栄」は、「秋葉三尺坊」(2)と結縁し、これを祀ったことが創建の由緒とされています。この点を以下に見ていきます。

江戸期の同社は、「秋葉大権現社」と呼ばれ「火伏の神」として武家(境内には諸大名から寄進された灯籠が複数現存)から庶民に至るまで、様々な階層の人々から信仰をあつめていました。また当時の同社の様子を伝える『江戸名所図会』からは、門前に構えられた店の賑わいぶり、さらに歌川広重の『江戸名所百景』にも紅葉の名所として描かれており、江戸時代には、観光地として賑わ

枕元に現れ「随ひ可参」と述べた。かような夢想を繰り返し見たことから、葉栄は常に「三尺坊の秘法」を修し、「精心此神二寄」せるようになった。

さらに「縁起」は以下の内容を伝えています。

・元禄十五年(一七〇二)、千葉葉栄は、様々な経緯を経て、百姓岩田与右衛門より同社地を譲り受けた。
・やがて上州沼田城主本多伯耆守正永の信仰を得て、同社が合祀されるかたちで、火産靈命(千葉秋葉大権現)・宇迦之御魂命(千代世稲荷大明神)を祭神として、修験道千葉山満願寺が創建された。
・以降、同社は別当寺である満願寺によつて管掌されることとなった。

また同社には豊富な古文書群(以下「秋葉神社文書」と呼ぶ。)が残されています。「秋葉神社文書」からは、近世の秋葉信仰の広がりの中で、同社が「火伏の神」として庶民の信仰をあつめる一方で、大奥とその女中、大名(水戸徳川家・本多家・酒井家等)や公家(一条家)の「祈祷所」として、その利益を求められていたことなどが分かります。



寄進灯籠

秋葉神社文書の中には、宗教史的に重要な史料が含まれており、とりわけ享保二年(一七一七)、神祇管領吉田家(4)より発給され同社に下された「宗源宣言」(5)は、発給手続きを示す史料が少ない中で、大変貴重なものであると言えます。

(墨田区文化財調査員

大関 直人

注

- 1) 墨田区教育委員会『墨田区古文書集成Ⅰ(秋葉神社文書)』一九八七年、墨田区古文書集成Ⅳ、一九九〇年
- 2) 観音菩薩の化身とされる。一般的には、刀難・火難・水難、特に火防の霊験あらたかな天狗とされる。
- 3) 絵画などに表された神仏・人の姿
- 4) 室町時代中期から江戸末期にかけて、吉田家当主が神道界の首長であることを主張し、自称した称号。
- 5) 中世以降、神社・神職を支配した吉田家によつて諸國の神社に位階・神号を与えた文書のことを指す。

赤穂事件・忠臣蔵と墨田区

○江戸城での刃傷と赤穂藩の取り潰し

赤穂事件の起こった元禄14年(1701)は、戦国時代の記憶が遠くに去った泰平の世、5代將軍・

徳川綱吉の治世が爛熟していた時代でした。播磨国(兵庫県)赤穂藩の三代藩主・浅野内匠頭長矩は、京都から来る公家の勅使御馳走役を幕府から仰せつかっていました。

公家を接待する儀礼を長矩に教えるのは、旗本・高家の吉良上野介義典でした。確かな理由は分かっていませんが、長矩は3

月14日江戸城本丸松の廊下で義典に対して刀を抜いて斬りかかり、側にいた梶川与惣兵衛に組み止め

られました【図1】。義典は傷を負いましたが、命に別状はありません



図1：『忠雄義士伝』巻之三

即日切腹の処置を受けました。その結果、赤穂藩は取り潰しとなり、4月15日城を明け渡しました。一方、吉良家には幕府からの処分はありませんでした。

○屋敷の移転(墨田区との関わり)

当区と赤穂事件の関わりは、松の廊下での事件から約半年後に、吉良家の江戸屋敷が、江戸城近くの呉服橋内から、本所松坂町に移されたことによります。公益財団法人三井文庫所蔵の「改撰江戸大絵図」には「キラ左衛」と記されています【図2】。

○吉良邸討ち入りと切腹

浪人となった赤穂藩士は、旧藩主の仇を討つのか、御家の再興を目指すのかで、意見が分かれまし



図2：『改撰江戸大絵図』、元禄14年(1701)10月(公益財団法人三井文庫蔵)

た。結果として、御家再興の望みがなくなったことにより、旧藩主の仇を討つことに決まりましたが、多くの藩士は脱落し、最終的には四十七士が残りしました。翌年12月14日、本所松坂町の吉良邸に討ち入りを決行し、義典の首を挙げました【図3】。

本懐を遂げた浪士たちは長矩の菩提寺・泉岳寺で墓前に報告した後、幕府の命に従い4つの藩に分かれて預けられました。主君の仇を晴らした浪士たちを、忠義の臣とするのか、幕命に背いた国家秩序を乱す者とするのかで、幕閣の意見も分かれていましたが、切腹という武士としての対面を尊重しながらも、後者に重きを置いた裁

許が下りました。一方、義典の息子・左兵衛は高遠藩諏訪家にお預けとなり、宝永3年(1706)現地で死去、御家は断絶しました。

○赤穂事件その後(忠臣蔵とは)

センサーショナルに受け止められた赤穂事件は、歌舞伎や浄瑠璃など文芸の世界で多く演じられるようになりました。もともと著名なのは『仮名手本忠臣蔵』で、寛



図3：『義士銘々功名之図』

延元年(1748)に浄瑠璃で、翌年歌舞伎で上演されて以来、その数は枚挙に暇がないものとなりました。以後、世間では「忠臣蔵」の名称で、赤穂事件が知られていくようになりました。

現在でも当区では、12月14日に義士祭が、12月第二週の土日の二日間には、元禄市と吉良祭がおこなわれ、吉良家と赤穂藩士の双方を偲んでいます。

(すみだ郷土文化資料館

専門員 福澤 徹三)